



近世說美少年年錄

六編
五



~ 13
3567
30



門 13
 號 3567
 卷 30

新編 石童子訓卷之十五



東都 曲亭主人口授編次

第四十五回

意見を示して使者先途を焚き
 前怨を成て頭陀得度を許す

登時石見女好純の九四郎の打向ひて晤譚いふと、奥の室に在りて年十六七
 ある雨箇の少女、浴衣の腰下、袖と袂と、飲喚傲と著。銚子酒盃をとり、次は
 拇殺又其次は、美濃の酒菜を九四郎并に杜四郎、米六等
 小薦り多く、主客の口誼精訖り、酒盃巡り、小届る時、石見女のいふ、喬の
 多端、小ち紛と、言後れ、ひに思ひ、ひる、種々の土産を、授惠せられ、多
 飲ひ、是は、小優を者多し。千謝萬謝も、猶足らざる、然るを、僅に、一献の、饗宴、心
 心、知ら、如く、當國の、野味、あれども、海鱈、のみ。只是、湖水の、鯉、鱒、瀬

新編 石童子訓 卷之十五

文藝堂藏

早稲田 大學 図書館
 昭和 34.6.3 受
 藏 書

飽て十二分ありぬ。是より先小伴當四徳の客房に酒飯の款待あり。老僕某甲盃を薦めて酔を盡し。既小九四郎主人夫婦別れを告て去らむ。時石見の豫準備の藥籠三箇許折敷小戴字を合中へ先其一箇を九四郎小贈りてのり。十三屋主這仙丹の前夜既小知られ。如く我家相傳の神藥にて金瘡小即效あり。只死を起とのる。幻術ある敵と戦ふ時是を一口小含て吹て其敵の面を打へ眼眩をも脚難く其妖術行とて立地小伏誅せし。或は又老奴變化の者其隠頭無邊無量小く弓箭刀劍を以て制し。かゝるも這仙丹を酒小雜へ薦めてよく酔され。其妖敗とぞとる者あり。昔唐山胡元の時胡人妖術を以て人小禍害とる者多し。猫鬼の類即是。時小濟世道人と喚做し。一箇の神仙這仙丹を患者小施して妖邪を對治せし。其已小勝利ある者彼

螢火鎗柄丸小百倍を當時我遠祖へ冠守りてあり。一総商舶小俱せられて元國不到。日彼神仙小邂逅して這藥方を受し。歸朝の後子孫小傳へて家の秘方とせ是より以降家督たる者一世二度是を煉ぬ。其製藥容易とぞ齋とる者一百日火を改め別室あり。朝夕妄想を駭除きて天地小祈りて是を成せり。縦親族よりいふも深信あり。是を興へて又術行狀正し。若し者あり興へ多し。秘しとるは人是を知る者稀と遮莫和殿等三賢才。我先師の骨肉也。世の豪傑と覺ゆる小這折を以て分與ふ。非除仙丹ありといふも又何人の為子藏ん大江峯張両才子。異日袂を分つ折贈らむ思ひ。今よ折られ進りて。這をあらぬ。と。又兩箇の藥籠を合て杜四郎と米六小遞與せ。各受戴せ。飲ひ面小見れ。開か中九四郎ハ

石見小僧謝してのふやう。如たの這仙丹の病苦を救ふのそらうど是軍陣小大益あり。九四郎えんぞ身單小藏めて秘薬小做えんより。治比の大人小晋上せお躬方の為小大利のべし。最忝くいと応へ懐小夾れば杜四郎茶六も共小のふやう。今小不たぬ主翁の恩祝今日の團坐小干るを。治比のふた飲びる小世小未曾有の仙丹の價千金萬金多哉目今報ひる小物あるを懐とを幸歴て安藝へ還るの日賢息。観吉郎猶周防のまさ必那里小立より一臂の勞小代さず。情願小の外はせと小石見の妻長江も俱小本意ある面色もて又茶を薦めらるを九四郎へ謝く受む主人夫婦小ち向ひて在下の大後日の比正小立去らまく欲を重く見参くるべし。失敬有怨を願まるといひ果てを起せ杜四郎と茶六も燭を秉て後先小立て玄関まで送る程小石見小も客房小出て袂

を分りけり。當下四摠の挑燈を老僕小借ひて外面小在り。今九四郎の生るを見て先小立り。城門をぬり夜更なれば石見小が豫番士小生るれば障りもあも共侶小当晚交中の比及小津回屋小より来て主僕祝小就にふける其次の日小杜四郎の茶六と俱小治比の親胞兄弟小進るをへは津屋小を相整て共小津回屋小赴たて九四郎小對面多其書を渡して云と昨日の餘談小及小程小九四郎がゆやう。高嶋主の深切小就て我亦思惟小辛踏の鬼妻阿夏の老母へ我妻乙藝の継母也五稔養育の恩多は小あらも然るを他小幸もて良人小後れ刺頼女を亡ひればさるべもわらも做さるるべし。前夜既小より復さる彼金二百九十五兩の落葉の刀自の要金もさる。和君達小も知られり如く。其内小中百兩の我茶六の為小償ふて落葉の刀自小返さる。其返金五十兩の木玄和

尚小借用をり。又五十兩ハ我九四郎ハ治比の大人より賜りたる恩祿
 ろれハ我物へ通てハ二百兩を五兩ハ當初朱之少ガ路費ハ使ハ亡ハ
 飲ハ我命多シハ四十五兩の。今又是ハ五兩増て其五十兩を。阿夏
 老亭ハ贈りるハ彼身の一生涯を養ふ。是則ハ藝の為ハ
 報恩の一義あり。残る二百五十兩ハ百兩を落葉の刀自ハ五十兩を本玄和尚
 小返を時の損益あり。世ハ大丈夫者ハ一飯の惠ハ必報ハ睡眈の怨も
 必報ハ我もの心ハ藝の本意也。藝の心ハ落葉の刀自の慈善ハ稱
 ふ。這支誰何と談まれば杜四郎と采六ハ所ハ俱ハ感ハ己まて余ハ
 と忘ハ又九四郎のハ是等ハ事ハ證人ハ後の為ハ宜ハ采
 六ハ準備の金子を懐ハ旅中ハ腰ハ跨ハ俱ハ彼宿所ハ赴
 江ハ迹ハ杜四郎と四摠の。或ハ故御の光景を尋問ハ或ハ當城内ハ

あり。衆少年の試験の為体をしハ思ハ時を程ハ
 九四郎ハ采六ハ持ハ隣ハ老亭の宿所ハ。そハ來ハ杜四
 郎ハ席を譲ハ那里の首尾を諮問ハ九四郎ハ老亭ハ面談ハ
 て意衷を示ハ七齋ハ。五十金を贈リ。阿夏ハ老亭ハ膽を潰ハ
 云云と辨ハ我亦理ハ述言を盡ハ屢論ハ己ハ小彼小
 忠ハ阿夏ハ。隨那里ハ在リ我ハ。九四郎主ハ仁義の人ハ怨
 嘆の聲ハ断ハ。俱ハ老亭を論ハ。九四郎主ハ仁義の人ハ怨
 小報ハ徳ハ。是等ハ。然ハ推辭ハ。老亭ハ感涙ハ拭ハ果ハ件ハ金を受戴ハ。登時ハ小忠ハ
 老亭ハ代ハ金子受納ハ。実一通を書写ハ。加印ハ。阿
 鍵ハ俱ハ老亭の為ハ飲ハを陳ハ。我ハ老亭ハ向ハ。の



志の段の本文
 第十三丁小足定

如幻如泡尼
 草庵同居の
 登古呂



ひんご法師

妻が来て酒菜の枯る乾羊魚も心の清に蓮根の糸のひひ引
く糸錫結乾瓢炙鶏卵拵加子の塩漬も現一口ゆらひひ死人の誠
ふ九四郎の折と飲ひて四摠も俱呼集令四郎柴六甲とあり。茲
ふ僅小送別の盃を果を程ふ冬の目も短くて下晡あり。九
四郎の杜四郎をいそぐ。立て且のやう。和子達を争かへり去りて。高
嶋主人昨日の謝美を宜しく言傳ひてよ。柴六我為小昨夜借し
高嶋の挑燈をりてめたて老僕小謝して返せ。暮果る城内へ出入
容易るべうと。疾還らむやと促せば杜四郎も柴六も告別さす言語急
迫治比の二美のいさへてこ。藝刀自ぬ。木玄師父の宜く言傳ひぬ。
の果て身を起す時四摠かをさ差せと彼挑燈を柴六受合ひり引提
て杜四郎俱して出てゆくを九四郎并四摠さ客店主人集三の店前

る馬繫柱の邊小立て目送りけり。然と十三屋九四郎の其詰朝四摠を俱
て早旦小津問屋を立ち去り。家路を投りて老亭小忠三等ひもぞ知
を是日未の左側小阿夏の老亭九四郎昨日の言傳を謝せんて果子一
折櫃と佳茶一囊を齎しく庭門傳小津問屋小赴て九四郎を尋る宿
の女房を迎へ。彼客人の今朝風小立去るのひぬと告げ。老亭の望を失ひ
て悔しく思ふ今さうせん徳もあらぬ。然し一由浮橋の本性のれは毫も
脱落らぬ面色ゆへ否彼人か然る要なり。あや夜の不慮のるも集三
主の痛。由効勞をわけまう。報ひのん。恥づ。けれ。の。夢をひ
ねとのひの件。果子と茶を渡せ女房苦笑。て。思ひ。ひ。の。死。心。配
小預り付。鄙語の。餘り物。福。と。受。戴。け。老。亭。の。他。入。欺
難。て。曉。り。れ。け。り。と。思。ふ。の。是。將。い。う。悔。れ。を。然。氣。見。せ。と。宿。所。小。入

〇ちちト小忠二阿健あけんの云と告つとむ。小忠二眉まゆを擡ためて黙然もくねんとして半响はんきやう許ゆる只
 九四郎くしやうらうの立たちのきを知らぬ。告別こくべつもせ。送懐おくりなも喰くだけ。九四郎くしやうらう四擡よんたの
 〇の下の話わらわ。然しかる程ほど小觀音寺おんあみの城しろ内うちの市井いちゐの類るい。一口鬼ひとく夫と安倍あんばい
 の盗見たうけん金九郎かねくわうらうの。成就じゆじゆと拘く杞こ村むらの村長むらぢやう故老こらう并なみ三池さんぢ郊かうの宿しゆく六むを召め
 〇せて他たの素生すうせいを質問しちもんの。原是げんじ金九郎かねくわうらうの拘く杞こ村むらの社ぢや客きやく留守くしう七しちの獨子どくし
 〇二親ふたぢやう身故みごとり。後のちに無頼むらい做しよらる。近曾ちかぞう借財しやくざいの為ために相傳あひたつたの田
 圃ぼの。居宅いぢやくの人の活却かつかくと竟つひの無宿むしゆくの做しよらる。〇の故ゆゑに小父ちち宿しゆく六むを敷し
 〇敷訓しきくんの詞ことばを盡つくす。時々折檻せつげんの眷けんを抗かたむ。〇の盆ぼん九郎くわうらう毫ごも怕おそむ。及および
 〇窮鼠きゆうそ猫ねこを咬かむの勢いきりあれば宿しゆく六む得と勤ごん當どうと寄よ着きゆる。〇の宿しゆく六む一口鬼ひとく夫と
 〇夫との毎まい日にち金九郎かねくわうらうを獄ごく舎しやより牽ひ出だせ。其積そのつみ悪あくを責問しちもんの。金九郎かねくわうらうの當あ初はつ
 〇大江杜四郎おほゑづしやうらうの刀子たばを偷ぬすめり。其後そののち末朱すゑしゆ之の。共とも宿しゆく六む吾足齋ごそくさいの宿しゆく所ところの潛ひそり

〇彼の家の蟬せみ蛉あひ女め晚おそ縮ちぢを擡ためて出で去る。折せ吾足齋ごそくさいの撞見つづけんと彼身かのみの深ふか
 〇痰たんを食くせし。竟つひの死しの至いたり。〇の妻つまを女め淫ひんし。或あるは
 〇人の小嬢せうぢやうを勾引かきこして人肉にく經へい紀き小賣渡せうばいと。〇の幾番いくばん飲のみあり。〇の招まり
 〇既すでに分明ぶんめいされ。鬼おに夫と則すなはち高頼たかたの主ぬしの。〇の次つぎの日ひ金九郎かねくわうらうを申明まへあ亭ていへ牽ひ
 〇出でまて死刑しやうぎを行なひ。是日このひ鬼夫おにとの拘く杞こ村むらの長ぢやう并なみ宿しゆく六む及および吾足齋ごそくさいの
 〇鬼妻おにつま老らう并なみ津向つむかう屋や集ぢ三里さんり正故老せいこらうを召めて。〇の宣示せんじを。〇の盗見たうけん金
 〇九郎くわうらうの。〇の積つみ悪あくあれば。既すでに死刑しやうぎの處ところに。〇の皆みな這ひ言ことばを存ぞんへし。
 〇但ただし同惡どうあくの罪人つみびと末朱すゑしゆ之の。今いま往ゆ方かた知しれ。〇の吾足齋ごそくさい身故みごとり。〇の
 〇ハ里正故老りせいこらうの。〇の代しろり。〇の他たを見みせ。〇の捕とらへ。〇の剛ごう小せうの。〇の
 〇提たげらる。是日このひ又また鬼夫おにとの當藩あつぱんの兵頭へいぢう高嶋たかしま石見いしけんの老僕らうべ某甲かいつやを召めて。〇の
 〇宣示せんじを。〇の前まへの如ごとく。且かつの。〇の金九郎かねくわうらうの罪つみ定さだり。〇の既すでに死刑しやうぎの行なはし。〇の

其許止宿の故客大江社四郎峯張六郎等不又問ふはるるなり。
 今よりの後行も止む彼人々の隨意あり。這を主人の傳へよと提て夏
 皆落許あり。是より幾小二三日を登て阿健小忠二の隱田の事他等も
 品證居あり守の疑を解ふ足ると。歸村の事を命せらる其故八件の隱
 田の素より阿健の化粧料ゆて大夫次の遺田ありと。あをよて最久彼
 家滅亡の事を籍立を免れて没官せられし。是等の公事も鬼大夫
 奉りて着落の日阿健小忠二福富の村長等を召して宣示を所あり。
 然るにこれ阿健小忠二始て怡悦の眉を因て福富村へ入りの去らま
 ち小阿夏の老芋が身單之所寓るを憐れむ。憐れむと云ふより。老芋
 の借地を集三返して諸家以家作夜物等の不用多を售て十八九金を
 得たり。阿九四郎の贈する。五千金と共七千金の貯積あれば。是を

生涯の計を故まがやとて其内中六十金を小忠二預けて福富村へ
 伴ふる。是よりして阿夏の老芋の彼酒肆に歇りて居り。措名の為小朝夕
 の薪炊の資助ふ故と。今幸も既小尾ふありて一日雪の痛く降けり。
 曠氏日小年數六半より一箇の行僧福富の店前小立在て念佛して一
 宿を乞けり。阿健の昔羊良人太夫五がゆて之をありしより。其日を則命日とて
 香華を贈る。さるる今日も其日小値りし。然て件の行僧を喚入れて脚
 を濯せむと。就て納戸小案内にて火桶を與へ茶を薦る。小行僧の右邊の家
 庭を見之て且廻向する程の措名老芋の遠く。茶粥を煮て薦めけり。當下
 件の行僧阿健老芋をつくと見ゆ。嘆小嗟嘆と其過去を談むる。素
 より相識者の如く。死堂を指ふ似て。阿健老芋の胸を潰して先其法名
 を諮る。小行僧答て我名の幻泡と喚做し。羊來大和の六田川小在り。如如

來禪師（あきつ）に従事（しゆ）して不二法門（ふにぽうもん）の妙要（めうよう）をゆえれば行脚（ぎんかく）して這地（こち）不到（たう）なり。知
 嬢（ぢやう）生來（しやうらい）落命（らくめい）あるも然（しか）し佛縁（ぶつえん）あるふあふを時（とき）に至（いた）る故（ゆゑ）小火宅（せうかたく）の
 煩惱（ぼんごう）を免（ま）れり我今（われいま）不可思議（ふかぎ）の法語（ほふご）あり俱（とも）小聽聞（ちやうもん）を一人（ひとり）の世（よ）の果敢（ぐわかん）
 るに無常（むじやう）迅速（じゆんすん）の鷲（じゆ）易（い）悟（ご）りて我を説諦（せつてい）し菩提（ぼだい）正覺（しやうかく）の入安（にりやす）く
 ぬが言（こと）を和解（げんげ）し示（し）す小其言（そのこと）婦切（ふきり）も通（とほ）せむといふ者（もの）あければ阿健（あけん）の
 阿夏（あしや）の老苧（らうしよ）の羊來（やうらい）の凡慮（ぼんりよ）俗情（ぞくじやう）を立地（たつち）小洗除（せんじよ）れ深信（しんじん）膽（たん）小銘（めい）志（し）俱（とも）
 小十念（じゆしげん）を受（う）けしより女僧（にょそう）小做（しよ）らまき思（おぼ）ひ起（おこ）して隨即（すうじ）這（こ）を希（ねが）ふ阿健（あけん）同
 意（い）の先夫（せんぷ）去（さ）の生死（しんじ）存亡（ぞんぼう）を回（ま）之（の）知（ち）りまき欲（ほ）する小幻池（げんち）法師（ほふし）頭（づ）を掉（お）て天接（てんせつ）
 小臺（たい）も漏（も）れんぞ後（のち）みみり知（ち）るようあふ其良人（そのらうじん）亡命（むじやうめい）して十年（じゆねん）を歴（へ）て還（かへ）
 らむ其妻（そのつま）尼（に）小做（しよ）るとも孰（しやく）欽（しん）是（ぜ）を疎忽（そこつ）とせん剃髮（しはつ）のる小饒（にやう）を下（くだ）し後（のち）の離（り）
 合（あ）の示（し）しごととの小老苧（らうしよ）も未（ま）之（の）の後（のち）の禍福（わざはひふく）を回難（まがたがた）て俱（とも）小得度（とくど）を願（ねが）し

小幻池（げんち）法師（ほふし）點頭（づ）て今宵（こんしやう）の既（すで）小更（さら）闌（らん）す明日（あした）剃髮（しはつ）するを儲（たくら）の卧（ふし）簾（しん）小
 案内（あんない）を請（まね）きて就（す）て枕（まくら）小就（す）はけりかくて其詰朝（そのむせあさ）小忠（ちゆう）三措（さんそ）名（な）の阿健（あけん）老苧（らうしよ）の
 剃髮（しはつ）の毛（け）を安（やす）知りて俱（とも）小肚裏（ぶら）小思（おも）ふや阿夏（あしや）の老苧（らうしよ）の左（ひだり）まされ右（みぎ）まされ我（われ）の
 自（みづか）阿健（あけん）の即（すなは）君子（くんし）を法（ほふ）の存亡（ぞんぼう）の安（やす）定（じやう）るぬ小剃髮（しはつ）の早（はや）くむとといふ
 小それぬ時（とき）誼（ぎ）あるれば度外（たふがい）小措（そ）て疑（ぎ）を先客（せんかく）僧（そう）小齋（さい）を果（は）して阿健（あけん）老苧（らうしよ）の
 小剃刀（しはつば）盥（う）の准備（じゆんび）をまはる程（ほど）小件（けん）の西箇（さいこ）の婦人（ふじん）等（ら）の俱（とも）小衣裳（いさう）を整（ととの）へる
 家（いへ）下（した）の居（ゐ）り當下（たうげ）幻池（げんち）法師（ほふし）の網編（あみ）の爰（こゝ）小藏（ざう）の袈裟（けさ）法衣（ほふえ）をわし被（か）て
 先佛（せんぶつ）檀（だん）ある本尊（ほんそん）佛（ぶつ）を戴（たい）足膜（そく）拜（はい）を畢（は）りて阿健（あけん）老苧（らうしよ）小髻（け）を解（と）披（ひ）せ各（おの）其
 雲鬘（うんま）を八箇（はつこ）小紉（ひ）て為（な）小經（きやう）を讀（よ）む偈（げ）を唱（とな）す剃刀（しはつば）を合（あ）抗（か）て剃（し）て圓頂（えんてい）の優婆
 姨（い）小做（しよ）る則（すなは）阿健（あけん）の法名（ほふな）を如幻（にょげん）と命（めい）け阿夏（あしや）の老苧（らうしよ）の法名（ほふな）を如泡（にょぼう）とを隨
 即（すなは）十念（じゆしげん）を相授（あひま）て度帳（たふちやう）を寫（か）して取（と）れば阿健（あけん）老苧（らうしよ）の願（ねが）衝（つ）て導師（だうし）を礼

拜をりける當下幻泡法師諭して道く。女人其性嫉妬なるあり。這故に
 成佛もて。あをめて儒教も女の嫉妬なるあり。百世を抜ふと有り。余も
 法華經提婆品八歳の龍女成佛のあり。是時小方之龍女摩尼宝
 珠をもて釋尊に奉獻す。這個宝珠に則龍女の神魂之釋尊是を受ぬ
 時龍女の成佛知る死の非如女人の僻るも心を佛に做さず。只其工
 夫に至らざる。昔當麻の中乘尼平將門の女如藏の如く女人成佛の微を
 汝等今より佛經を讀習ひて其經文を解し。ゆるまて許すの歲月を積まれ
 ば。只日毎に佛名を十萬遍相唱へ且其間小涅槃經四句の偈を誦
 へ。俱に成佛を樂ふべし。浮世の諸行無常之佛に寂滅を樂とて人各命終
 する時。經營不違のみ。善惡を做さず所々。是則寂滅為樂之然れども心
 靜あり。されば漫に外物に誘引して。一大事を忘る。小至れり。其の故に佛門の

徒を名つて禪定門といふ。禪に靜に定む。靜に汝等靜坐默識して禪
 定にたん時。年五十ふ至らざる。俱に諸國を行脚して。靈山灵地に詣り。毎
 日佛を拜して懺悔せば。良人の存亡を知る時あり。其子の禍福を悟る。日
 らん。如く辨る。と。教化丁寧あり。け。如く幻泡の如く。側を
 小忠二指名心。小斯丁太郎。表。渴仰隨喜せ。い。坐。湯を
 けり。教化既小果。幻泡法師の袈裟法衣を故の如く。後小藏め。て。
 告別して去ら。ま。如く幻泡の推禁めて。准備の布施二包を。盆ふ
 載て。薦に。幻泡退けて。敢受を。且。捨。只是有漏の縁。家へ。乞
 食。く。世を渡る者。金銀錢財。家人。大毒物。を。布施。昨宵の宿
 也。足。暇。身を起。と。草鞋穿。婦。髪。背。を。戴。死。錫
 杖を。衝。鳴。雪の。細道物。とも。是。往。方。も。知。ら。ぬ。け。り。其。後。本。村。の

長某甲（かみ）が何（なん）健（けん）老（らう）亭（てい）の剃髮（しはつ）をば知りてそを訪（もと）んを來（き）ふける折（せり）幻（げん）泡（ぼう）法（ぽう）師（し）の心（こころ）をばて駭（おど）嘆（たん）して且（かつ）のうらひぬ日（ひ）人の噂（うわさ）もぬ近（ちか）曾（そう）彼（か）大（だい）和（わ）の六（む）田（でん）川（がわ）の如（ごと）來（らい）禪（ぜん）師（し）の這（こ）道（どう）江（え）路（ろ）の行（ゆ）脚（きゃく）者（しや）のふ光（ひかり）りを色（いろ）を名（な）を埋（う）めて一切（いっけつ）凡（ぼん）夫（ぶ）の知（し）らざるも但（ただ）佛（ぶつ）縁（えん）ある家（いへ）の二（に）宿（しゆく）ををぬるう恐（おそ）る其（その）幻（げん）泡（ぼう）法（ぽう）師（し）の如（ごと）來（らい）禪（ぜん）師（し）のあつてもとといふ如（ごと）幻（げん）泡（ぼう）のまゝ小（こ）忠（ちゆう）三（さん）指（し）名（な）もちぬ爲（ため）だて始（はじ）り悟（さと）る値（ち）遇（ぐ）の縁（えん）俱（く）深（しん）信（しん）弥（み）増（ぞう）けり然（しか）今（いま）茲（こゝ）果（は）敢（かん）る暮（くれ）て其（その）次（ぎ）の春（はる）二（に）月（げつ）の時（とき）候（う）阿（あ）護（ご）の如（ごと）幻（げん）泡（ぼう）の忠（ちゆう）二（に）の商（しやう）量（りやう）も本（ほん）宅（たく）の背（せ）の（の）方（かた）小（こ）冥（めい）地（ぢ）のをゆて其（その）里（さと）小（こ）草（そう）の庵（あん）を締（し）めて如（ごと）泡（ぼう）と同居（どうきゆう）の室（むろ）に一定（い）定（てい）て酒（しゆ）肆（し）の名（な）残（ざん）あり小（こ）忠（ちゆう）二（に）天（てん）婦（ぶ）の取（と）りせりその折（せり）又（また）老（らう）亭（てい）の如（ごと）泡（ぼう）の嚮（かう）ふ小（こ）忠（ちゆう）二（に）の預（よ）けり被（ひ）六（む）十（じゆう）金（ぎん）ををり良（ら）田（でん）良（ら）圃（ぼ）を購（かう）求め年（とし）毎（まい）の衣（い）食（じき）の料（りやう）も猶（なほ）且（かつ）如（ごと）幻（げん）泡（ぼう）の隱（いん）田（でん）の俱（く）小（こ）食（じき）も及（およ）びて早（はや）暮（くれ）小（こ）香（かう）を焼（やく）た花（はな）を折（せり）て佛（ぶつ）の仕（し）るの外（ほか）他（ほか）事（こと）も如（ごと）

幻（げん）の黄金（こがね）の上（うへ）を掛（か）念（ねん）せど如（ごと）泡（ぼう）の朱（しゆ）之（し）の思（おも）ひ世（よ）の倒（たふ）ふ安（やす）しとゆひけりよ是（これ）後（のち）の語（ことば）あり案（あん）下（げ）某（た）生（せい）再（さい）説（せ）小（こ）程（ちやう）大江（たいやう）社（しゃ）四（し）郎（らう）成（せい）勝（しやう）堂（だう）張（ちやう）染（ぜん）六（む）郎（らう）通（つう）能（ねい）の彼（か）盜（たう）見（けん）金（ぎん）九（きゆう）郎（らう）の支（し）果（は）て進（しん）退（たい）自（じ）由（ゆう）ありし先（ま）や這（こ）地（ぢ）を立（た）去（さ）りて猶（なほ）北（きた）國（こく）赴（しゆ）んを主人（しゆじん）夫婦（ふうふ）の別（わか）れを告（つ）げ更（さら）に起（おこ）行（ぎやう）の用（もち）意（い）を成（せい）程（ちやう）の月（げつ）屬（ぞく）親（しん）と交（かう）參（さん）する長（ちやう）橋（きやう）倭（わ）太（たい）郎（らう）象（しやう）船（せん）并（へい）弥（み）賀（が）志（し）賀（が）みんごの他（ほか）も同（どう）藩（ばん）の少（せう）年（ねん）幾（いく）名（な）飲（いん）早（はや）くそのををば知りて詣（よ）來（らい）て別（わか）れを惜（おし）むるや或（ある）の錢（ぜに）別（わか）れとて東西（とうせい）を贈（くわ）るものありし四（し）郎（らう）染（ぜん）六（む）郎（らう）の道（みち）路（ろ）の煩（わづら）ひあれは謝（あが）りてそをうけ受（う）けりける并（へい）が中（ちゆう）小（こ）曾（そう）根（こん）見（けん）五（ご）郎（らう）平（へい）宗（そう）玄（げん）の近（ちか）江（え）鯽（じゆう）魚（ぎよ）の一夜（いちや）船（せん）一（いつ）小（こ）桶（ぶく）を齋（さい）す來（き）て杜（と）四（し）郎（らう）染（ぜん）六（む）郎（らう）の告（つ）げをうけ而（しか）才（さい）于（よ）明（めい）日（にち）の立（た）去（さ）りぬるや寡（くわ）若（じやく）君（きん）既（すで）小（こ）聞（もん）召（めい）れて惜（おし）むるもの大（だい）くあるぞ今（いま）の禁（か）るるも留（とど）ますよ要（えい）ある物（もの）も贈（くわ）りて予（よ）が志（し）を致（いた）せよ内（うち）々の美（み）を以（もつ）微（い）臣（しん）を使（つか）ひ立（た）たれしや一夜（いちや）船（せん）の春（はる）夏（なつ）の間（ま）小

こと人の愛する者あるふ今冬の中氣也時節相病しうらむもの実小當
 國の名物は是喫るべしと口状持ふ爽然演て伴の船桶を渡り社
 四郎受戴せよと魚心ひらひも思脱と目目めれ米六郎と共福の程
 ろく拜味仕らんものも耳く由執成しをとり米六郎額衝れ兼て頼ま
 ること答へける既ふして五郎平の猶留別の詞を盡して且再會を契り伴當
 を持てて去りけり浩處石見女好純今朝城小出仕の後目今退りぬと
 えり米六郎杜四郎米六の方僅守より賜り一夜籍のるを告て其船桶を見
 せける石見女飲びて丹の各位を惜まぬ守の仁愛のべげと然れとも今日
 我先人の忌日あれば一家見皆精進之明日其餘味を拜せし和君等今
 日あを明日の他御へ立去るれば目今嘗ての急小若黨を呼しをて重
 封蔵する船桶の蓋をうら開き船炭箇飲而箇の珠子小表分る

製の濁酒一壺と盃箸をとり添へ他等の小舎小遣しけり杜四郎と米六
 素より船を嗜むも然し貴人の賜ものある主人の好意も黙止し
 ければ各其船一箇をたぐへ濁酒も多し飲まざらち相譚ふりあり
 一程俱小心地常るも猛可小胸張り腹痛と腸断離るるあり
 俱ふり堪を輾轉し苦難いへうもあざけり其聲奥へかえり石見
 女走り來り這為体の胆を潰しと連り人を呼立れば長江のさし侍婢等
 老僕若黨ま心走り來て薬よ水よと喋ぐの計のあ所を知らぬ當下
 石見女思ふや這両才子の病症の必是食傷あるん我家の仙丹の金
 瘡小の即效あれども食傷も亦毒の為小脾胃を傷らる者あれば其
 理は一のべり用ひ見ぬと尋思を考へ彼仙丹を水小解て杜四
 郎と米六の口中小沃込入る俱小四肢冷しと九死一生と見ぬもの



十六

女



女

利鏢を晃めりて巨楯
 杜四郎を撃つまくと
 此本文の第四板
 四十六回お出の
 後板發免の日
 合せ見るべし

正位
 二位箱荷大明
 杜四郎大調

三石童子言卷十三

ころ薬はよく吐降のぬとどろりみりと即效のひれど猶幸小家小藏也
 一角を細末ふして是をもよく用る程小病人等ハ煩悩の聲猶定
 りて卧簟小抱に入とられけり。既ふと日暮しと石見人の奴隷を医師
 許走らせて急小招によきまきも其途近小あざれば早の所要小支ぐ
 もあむと左右を程小杜四郎采六當晩丑三刻時候小甚しく吐瀉し
 よ。死さざるを祈り。其詰朝彼醫師來診して這少年達の病症ハ
 中寒よりなる食傷とて薬を調進されども杜四郎と采六を謝して其藥
 を飲まむと且のさう。最初彼仙丹と二角微りせよ已等ハ必死を縦即效の
 ども他薬を用ふべしとて猶前小病小從ひけり。俱小思ふやうにわれば其
 次の日石見人の昨日の飯鮓を取きて見ると飯の色酷く変りて訝る
 涯りもるを敢亦言次を告げ其鮓ハ遺もあつた。庭の土中埋め

て情地小後の病厄を穰ひけり。然る程小同藩の少年等及彼曾根見五
 郎平まで大江峯張の大病を安知りて日毎訪來て云々と安危を知らせり
 せり。倒小厭煩るべし。這病厄小年暮り明とて享禄四年のぬ違
 春正月の季小至りて杜四郎采六俱小大病瘥り果て氣力本復たせけん
 べ主人夫婦小再生の恩を謝し別とを告て立去らむ。欲する小石見人の
 のゆ。和君等大病の後幾程も。餘寒を犯して遠く走ら身を憂せり
 者小似たり。先一兩日近郊小杖を曳きて歩固を走後小障も。其折小起
 行も。選小あつた。とのり。の理り。杜四郎采六ハ漫行をせり程
 小又料らる小厄あり。あの故小杜四郎ハ肩小浅瘻を負ふ小至れる。其事の
 光景ハ綉像を前小し。又卷を更て且下回小解分るを願はり。

新局玉石童子訓卷之十五終



